

一 次の(1)〜(10)の各文の傍線部を漢字に直したとき、それと同じ漢字を含むものを、下の各群の①〜④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 10。

(1) サイジキで季語を調べる。 1

(2) ジゼン団体が募金を行う。 2

(3) 人のオウライが増える。 3

(4) 都市がスイタイする。 4

(5) 言葉にビニクを込める。 5

(6) 領土のヘンカンを求める。 6

(7) 恩恵をキョウジュする。 7

① サインシュツが税収を上回る。
② サイムを返済する。
③ 文書のケイサイを許可する。
④ 伝統あるサイレイを受け継ぐ。

① ムジビな運命にあらがう。
② ジミ豊かな食事をとる。
③ 古代のトウジキが出土する。
④ 乳牛にキュウジを行う。

① 証拠となる物品をオウシユウする。
② オウセイな食欲を示す。
③ 人間万事サイオウが馬だ。
④ 予想外の事態にウオウサオウする。

① スイチヨクに飛び上がる。
② ジョウウシャヒツスイの理を知る。
③ 新しい布団でジユクスイする。
④ スイハンキを新調する。

① ヒカク製品を手入れする。
② オウビに謁見する。
③ ヒロウの回復に努める。
④ ヒフク費を計上する。

① 辞典のカンシユウに携わる。
② 過払い金のカンプを受ける。
③ 骨董品のカントイを依頼する。
④ ポスターで注意をカンキする。

① 宴会のヨキヨウの準備をする。
② ドキヨウはあるが慎重さに欠ける。
③ キョウラクテクキな生活を送る。
④ すばらしい試合にネットキョウする。

(8) 面会をシャゼツする。 8

① 式典でシャジを述べる。
② 日差しをシャヤダンする。
③ シャジツテクキな油絵を描く。
④ 大規模なオンシャが行われる。

(9) 電源にプラグをソウニユウする。 9

① 蛙にはキソウホンノウがある。
② スイソウガク部に入室する。
③ 文章中に面白いソウワを盛り込む。
④ 業界の中でソウヘキをなす。

(10) 積み重ねたイントクが報われる。 10

① 詩のインリツを工夫する。
② ジビインコウカを受診する。
③ 正式にコンインを結ぶ。
④ コウイン矢の如しだと実感する。

二 次の文章を読んで、後の問い(問1〜9)に答えなさい。

たとえば「ワンワン」という言葉によって「犬」というカテゴリを学んでゆく過程を考えてみよう。我が家のボチがワンワンと吠えている。母がそれを指さして「ほら、『ワンワン』よ」と子供に教える。子供は、その生き物が「ワンワン」というラベルを貼られていることを学ぶ。そしてボチを見るたびに「ワンワン」と言うだろう。このとき「ワンワン」はまだ大人にとつての「犬」と同じような普通名詞ではなく、ほとんどボチという特定の犬のための固有名詞である(「ちようど『パパ』が、元来は〈父〉を指す言葉であるのに、普通の家庭では特定の一人物を指す固有名詞として用いられているように)。ところが、やがて親に連れられて外へかけてみると、見慣れた「ワンワン」(ボチではないが、それによく似たものが通りをうろついているのに出会う。親はそれを指さして、「ほら『ワンワン』よ」と言う。「ワンワン?」「そう、ワンワン」。子供は「ワンワン」というラベルが、〈ボチ〉だけではなく〈ボチによく似たもの〉にも適用できることを学ぶ。帰り道で、また別の、けれどもやはりボチに似たものに出会う。子供は指さして言ってみる。「ワンワン!」「そうワンワンよ、えらいわねえ」。こうして子供は二つのことを学ぶのである。一つは、既知のものラベルはそれによく似た未知のものに適用することができるというルール。もう一つは、「ワンワン」という言葉の適切な用法。(1) ある意味でこれを、子供が「ワンワン」のカテゴリを習得したのだと言ってもよいであろう。しかしこのカテゴリにはいくつの特徴がある。まず第一に、理論的ではなく実践的である。子供は「ワンワンなるもの」について考察することはできないが(この意味では「ワンワン」の概念をもたない)、出会うもの一つ一つについてそれが「ワンワン」であるかないかを言うことができる(この意味でなら「ワンワン」の概念もっている)。つまりこのカテゴリは概念として操作することはできないが、現実世界の中で使用することはできるのである。第二に、カテゴリの境界が曖昧である。「似ている」というのは実はいいかげんな基準であって、何がどの程度似ていればよいのかさだかではない。多分その日の気分がこの境界は揺れ動くだろう。これに対し生物学者の「犬」の概念は明確な境界を持っている(と信じられている)。

たとえ時にある種の狐を犬と見間違えることがあるにしても、それは「間違え」なのであって、境界自体が曖昧なものではない。ある属性をもつものは皆「犬」であり、もたないものは皆「犬」ではないのである。これに対し「似ている」という基準は、たとえばちのポチが黒くて怖い犬だとしたら、黒猫もゴジラも「ワンワン」と言いかもしれないのだ。黒猫とゴジラに何の共通点もないとしても、これらの結果として、第三に、このカテゴリは開かれている。新しい「それに似たもの」「それらしきもの」を発見するたびに、そのメンバーは増えてゆき、どこに境界があるのかわからないからである。一方、学者の「犬」のカテゴリは閉ざされている。定義によってどこからどこまでが「犬」と呼ばれうるかが決まっているからである。子供のカテゴリは実際に会った「ワンワン」たちだけがそのメンバーであり、新たなメンバーを加えることにそのカテゴリの全体像は少しずつ変容してゆく(1)の増殖によって内包が変わる)のだけれども、学者のカテゴリはまだ見ぬメンバーを含めてその全体が予め決定済みであり、もしカテゴリの概念内容が変化するとすれば、それはむしろ他のカテゴリとの理論的調整の結果である。(ii)

そもそも二つのカテゴリのあり方の違いは、考え方の出発点が違うことにもよる。子供のカテゴリ形成は、出会う個体をどう名付けるかという実践的な課題から出発しているのに対し、学者のカテゴリ分類は、存在しうる個体の全集合をどういう基準で切り分けるのが合理的かという理論的課題に応えようとするものである。そしてその方法はアリストテレス以来たいして変化はない。(iii)

「分類」とは、一つの上位カテゴリを複数の下位カテゴリに分割することである。従って、「分類」にはつねに上下の「階層性」の概念が含まれている。このとき複数の下位カテゴリ間には、確かな違いがなければならない。即ち「分類」にはつねに「差異」の発見(ないし指定)がともなう。また、上位カテゴリはさらに大きなカテゴリに属するであろうし、下位カテゴリはさらに小さいカテゴリに分割しうるであろう。従って「分類」はつねにツリー状の「体系性」を志向するのである。(iv)

「分類」には二つの作業が必要である。まず、分類の対象となる全個体の範囲をきつちりと決定すること。たとえば「動物」という「類」を複数の「種」に分類しようというのなら、まず「動物」というカテゴリの範囲(1)を決めなければならない。そのために、「動物」の概念(内包)を明確にしておかなければならない。次に、このカテゴリの内包にいくつかの境界線を引き、この線で切り分けられた領域の各々に「犬」とか「猫」などのラベルを貼ってゆく。この際もつとも重要な原則は、すべての個体なんらかのカテゴリに属すること、及び同一の個体が決して二つのカテゴリにまたがって属さないことである。このためには、当該「種」に属するメンバーは必ず持ち、それ以外の者は決して持たないような「種」独自の特徴を決定しなければならない。この弁別基準となる特徴が「種差」である。

こうして生物学者は、「類」と「種差」によって全生物を体系的に分類する。ただ、外見上の特徴に種差を求めると、曖昧なケースが続出してきれいな境界線が引きにくい。そこでより厳密な基準をもとめ、今では解剖学的器官の特徴をよりどころにする。その結果、見た目の印象とは逆に、鯨は哺乳類であり、魚よりも犬や猫の仲間であるとされるようになった。いずれ器官の特徴でも間にあわず、遺伝子構造の特徴によって種差を決定するようになるだろう。

このようなカテゴリ分類の方法的特徴は、全体から発出し、境界の決定によって部分を作り出すことである。言い換えれば「分節」という方法によってカテゴリを切り出すのである。従ってカテゴリとはつねに閉じられた集合である。しかし先にみた子供のカテゴリ形成の方法的特徴は、代表的な個体(ないし事例)から発出し、「それに似たもの」をつぎつぎと連結してゆくことによって全体を作ることである。いや「全体」というのはすでに適切ではない。子供は、ちょうど蔓を引く張って芋を掘りだすように、芋づる式につきつぎと仲間の事例を発見してゆくだけでも、いつまで掘っても蔓の先は地中に埋まって見えないのである。このような形のカテゴリとは、全体というよりも終わりの見えない連鎖である。

しかもこの連鎖は一本の芋づるでできているわけではない。複雑に枝別れたあぐく、いかげんなことには先のほうでは全く別の芋づるにつながっていたりする。というのも元の代表者に「似たもの」に「似たもの」という(2)な仲間がつけ加えられたりするからである。「友達」の友達はみな友達」というのがこの方式の特徴であり、この「友達」のカテゴリには、原理的に終わりが無い。子供が手にしているものは、「種差」という概念ではなく、芋づるという実践的なし

けなのである。とすれば、次のように言うてよいのではあるまいか。私たちの世界認識は、そのはじめ、キーキを切るように世界という全体を分節していくつかのカテゴリを設けることによって成立するのではなく、むしろいくつかの代表的事例を知り、あとはそれに似たものをその代表例の仲間として「友達」の連鎖を広げてゆくのだ、と。そして私たちは代表例のラベル、即ち「代表例」をその仲間転用することで、言葉の用法をおぼえてゆくのだ、と。

さて、それでは私たち大人の場合はどうなるだろうか。確かに私たちは「犬」のカテゴリを考える時に、その解剖学的器官を、ましてや遺伝子構造を考えたりしない。けれども、厳密さの点で差があるとしても、基本的には学者のカテゴリと同じくみであるように見える。「犬」という言葉に、私たちは個々の犬を思い浮かべるのではなく「犬なるもの」の概念を意識するし、「動物」の一部が「犬」であり、さらにその一部に「ゴキウ」や「狎」などがあるという「カテゴリ体系」を知っているからである。実際私たちは、名詞が具体的な物に貼りついた名前である幼児的段階から、「くなるもの」「一般」という(3)概念を表す段階へと進み、抽象的な概念操作が可能となるのであるが、これは知的発達過程での大きな飛躍であり、これ以後私たちの世界は徹底的に再整理され、構造化されると考えるのは自然なことである。

しかし、私たちは本当に明確に構造化された概念体系をもっているのだろうか。それは私たちがそう思いこんでいるだけではないのか。たとえば「ペンギんは鳥か」とか「蛸は魚か」といった質問をすると、人によって答が違うのはもちろん、同一人でさえその時によって答が違ってくるという実験がある。この時の質問に対し、普通の人は「鳥」や「魚」の定義を用意して答えているわけではなく、自分の持ち合わせる「鳥らしさ」や「魚らしさ」のイメージにどの程度あてはまるかをそのつど判断しているにすぎないからだ。とすれば、私たちが日常的なカテゴリ概念は、学者のものよりも幼児のものに近いのではないかと考えることが可能である。その一例が、概念についての神話を徹底的に解体した後期ヴァイトゲンシュタインにみられる。彼は「ゲーム」という概念を例にとりあげ、盤ゲーム(囲碁・将棋等)、カード・ゲーム(ポーカー・花札等)、球技(野球等)その他数多くの「ゲーム」と呼ばれるものがある。それではこれら全てに共通する特徴「ゲーム」というカテゴリを他から区別する「種差」は何か、と彼は問う。いくら探してもそんなものは見当たらない、その代わり、あるゲーム群を見るとたくさんの共通特徴が見られるであろうし、別のゲーム群に目を移すとその多くが消えて別の共通特徴が目に入るだろう、そしてまた別のゲーム群を見るとまた消えてゆく特徴と残る特徴と現れてくる特徴とがあるだろう、と言う。つまり「ゲーム」というカテゴリを構成しているメンバーは、全員が一つの特徴を共有しているわけではないけれども、各メンバーはいくつかの他のメンバーといくつかの点で似通っており、全体として複雑な類似性の網の目を形作っているのである。そして彼はこれを「家族的類似性」と呼んだ。家族は必ずしもみな同じ特徴をもっているとは限らない。しかしたとえば、父と兄と妹は身体つきが似ており、父と姉とは顔つきが、兄と姉とは瞳の色が、といったようにさまざまな類似性が重なりあい、交差しているものである。そこでヴァイトゲンシュタインは、「ゲーム」とは一つの家族であると言うのである。このようなカテゴリのありかたは、芋づる式カテゴリに近いであろう。

しかも彼は「ゲーム」という概念が「そればかりか「数」という抽象概念さえも明確な境界をもっていない」と言う。「何がまだゲームの内であり、何がもうゲームには入らないか。きみにその境界線が引けるか。無理だ。分類によるカテゴリは、まさに境界線を引きことによって生じたものであった。ヴァイトゲンシュタインの言っていることは、私たちのもつ自然な(日常的な)カテゴリとは、学者が特別な目的のために分類によって人工的に設定したようなものではなく、むしろ子供のものに近いということである。

(注1) アリストテレスⅡ(前三八四〜前三二三) 古代ギリシアの哲学者。

(注2) ヴァイトゲンシュタインⅡ(一八九九〜一九五〇) オーストリアの哲学者。

(注3) ヴァイトゲンシュタインⅡ(一八九九〜一九五〇) オーストリアの哲学者。



問1 傍線部(フ)「芋づる式に・(イ)「神話」は、本文中ではどのような意味か。最も適当なものを、下の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **11**・**12**。

(フ) 芋づる式に

- 11**
- ① 行き当たりばったりで。
 - ② 途切れ途切れに。
 - ③ 続けざまに。
 - ④ 複雑に絡み合って。

(イ) 神話

- 12**
- ① 根拠なく信じられている言説。
 - ② 一見矛盾しているように見える真理。
 - ③ 人の意表をつくような発想。
 - ④ 物事のコアをついた格言。

問2 傍線部A「『ワンワン』のカテゴリー」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **13**。

- ① 理論的に厳密に定義されたものではなく、現実世界の中での主観的な感覚を根拠としたものであり、他のカテゴリーとのせめぎ合いの中で全体像が徐々に明らかになってゆくカテゴリーである。
- ② 概念として操作できる理論的なものではないが、現実世界で出会うものに適用することができ、他のカテゴリーとの境界や全体像が常に変化してゆく可能性をもっているカテゴリーである。
- ③ 既存の概念から理論的に導き出されたものと、現実世界の中での経験に基づいて新たに獲得されるものの統合から生まれ、カテゴリーの境界や全体像が個人によって異なるカテゴリーである。
- ④ 実践的に扱うことのできるような概念ではなく、現実世界の中での経験をルール化したものであり、そのような過程を経るために他のカテゴリーとの境界に曖昧な部分があるカテゴリーである。

問3 本文から次の文が脱落させてある。元の位置は(一)～(四)のうちどこか。次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **14**。

こうして「分類」は「科学的」となる。

- ① (一)
- ② (二)
- ③ (三)
- ④ (四)

問4 空欄 **1** に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。なお、二つの空欄には同じ言葉が入る。解答番号は **15**。

- ① 外延
- ② 限界
- ③ 編成
- ④ 区画

問5 傍線部B「二つのカテゴリーのあり方の違い」とあるが、なぜこのような「違い」が生まれるのか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **16**。

- ① 子供のカテゴリーは実際に出会う個体から全体を手探りでとらえる中で作られるのに対し、学者のカテゴリーは閉じられた集合という仮定の概念内の分類を実際の個体と合致させるといふ課題に応える形で作られるから。
- ② 子供のカテゴリーは似通った特徴をもつ個体をつなぎ合わせて体系化する中で無意識に作られるのに対し、学者のカテゴリーは閉じられた集合という全体から部分をどう弁別するかという課題に応えるために作られるから。
- ③ 子供のカテゴリーは出発点となる個体に類似したメンバーが加わるにつれて境界が曖昧になるのに対し、学者のカテゴリーは出発点となる個体の定義を用いて現実の個体の集団を切り分けてゆく過程で作られるから。
- ④ 子供のカテゴリーは実際に会う代表的な個体から出発する終わりのない連鎖の中で形成されるのに対し、学者のカテゴリーは、閉じられた集合をどのような基準で切り出すかという理論的課題に応えて作られるから。

問6 空欄 **2** に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **17**。

- ① 画一的
- ② 間接的
- ③ 印象的
- ④ 表層的

問7 傍線部C「大人の場合」とあるが、「大人の」世界認識はどのようなものだと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **18**。

- ① 抽象的な概念操作が可能であることに表れているように、学者のカテゴリー認識と同様のしくみになっている。
- ② 学者のカテゴリー認識と幼児のカテゴリー認識の中間の厳密さであり、抽象的な概念操作が可能である。
- ③ 概念の体系がはっきりと構造化されておらず、幼児のカテゴリー認識に近いしくみになっている。
- ④ 日常的なカテゴリー認識と抽象的な概念操作を行うカテゴリー認識を異なるしくみで行っている。

問8 空欄 **3** に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **19**。

- ① 下位
- ② 普遍
- ③ 既成
- ④ 基本

問9 筆者の主張として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **20**。

- ① 日常的なカテゴリーの認識は分節化によって作り出されるものではなく、子供のカテゴリー認識のように実践的な過程で生み出されてゆく、曖昧で開かれた境界をもつものである。
- ② 日常的なカテゴリーの認識は差異の発見によって作り出されるものではなく、子供が言葉を身に付ける過程と同様に連鎖的な過程によって作り出されてゆくものである。
- ③ 日常的なカテゴリーの認識はアリストテレス以来の分類のやり方だけによって行われるのではなく、家族的類似性の中でも生み出されてゆく多層的なあり方をしているものである。
- ④ 日常的なカテゴリーの認識は子供の「カテゴリー」認識の知的発達の結果として自然に獲得されるのではなく、階層化や分節化によって全体を切り分けてゆく過程を必要とするものである。

三 次の文章を読んで、後の問い(問1～10)に答えなさい。

北海道斜里町に「越川橋梁」(正式名称「第一幾品川橋梁」)というコンクリート製の橋がある。高さ二一・六メートル、全長一四七メートルにもなるこのアーチ型橋梁は、戦時中に当時の土木技術の粋を集めて建設された鉄道橋である。元來この橋には、斜里駅(現・知床斜里駅)と根室標津駅(一九八九年廃止)を結ぶ国鉄「根北線」の線路が敷設される予定だった。建設に携わった労働者は過酷な条件のもとで強制的に働かされ、一人名もの人たちが命を落とすことになった。生きながらえた労働者の話によると、橋脚には人柱が埋められているともいう。

ところが、非常に残念なことに、この橋を列車が通る日は来ずじまいだった。戦後になって根北線は一部区間で営業を開始したが、越川橋梁が建っている区間までは線路が通じないまま、一九七〇年に根北線は廃止されてしまったのである。実際、残念の一言では片づけられないほど多大な労力と犠牲を払ってまで完成させた橋である。それなのに、この橋は戦時中の遺構としての意味しかもちえなかった。

橋の威容を目の当たりにすると、そして、建設当時の悲惨さを知ると、「なんともつたいない、先人の苦労は無駄だったのか」という気がしてくる。しかし、この鉄道橋を使わなかったことは、少なくともその時点の経営判断としては至極真っ当だったと言わなければならない。晩年の根北線は、一〇〇〇円の収入を生み出すために二〇〇〇円以上も費用をかけなければならぬ大赤字路線だったのである。もし線路を完成させていたら、損失はさらに膨らんでいたであろう。最後までやり遂げないのも、ときには美德でありうる。

よりよい意思決定を行いたいとすれば、過去にどれだけ投資したかは考慮すべきではない。つまり、今までに注ぎ込んだ資源・労力・時間ほどのみちも戻ってこないサンクコスト(sunk costs: 埋没費用)だから、将来に関する意思決定とは無関係である。

けれども、そうした過去の投資はしばしば私たちの脳裡をよぎり、意思決定を不合理にする場合がある。この心理現象は「サンクコスト効果」と呼ばれ、「コンコルドの誤り(Concorde Fallacy)」という別名ももっている。イギリスとフランスの高政府は超音速旅客機コンコルドを共同で開発していたが、たとえ完成したとしても採算の取れる見込みが薄いことが途中で判明する。だが、すでに多額の投資をしてしまったのだから今さら後にはひけない、という理由で開発を継続する。結局、コンコルドは商業としては失敗に終わった。

どうやら「コンコルドの誤り」は根深い現象らしく、学問の領域にも影を落とすことがある。現在では1を扱う学問と考えられている経済学も、サンクコストとみなされるはずの過去の投資を重視する理論を展開していた時期があった。たとえば、初期の経済学者たちの頭を悩ませた問題として、「商品の価値はどのように決まるか」という問いがある。「価値の本質は物に内在する何らかの量に由来する」という前提のもと、古典派の経済学者たちが価値を決定する要素として考えたのは、人間の労働、すなわち過去に投下された労働量であった(労働価値説)。この説によれば、商品には客観的な価値が内在することになる。

労働価値説には昔から疑問が投げかけられていたが、有力な代替案が示され、それが大きなうねりとなるのは一八七〇年代からであった。この時期の幾人かの経済学者たちは、客観的な価値の源を追い求めることはせず、個人の主観的な評価を議論の土台に据え始めた。これは経済思想史上の大変動であり(この「限界革命」以降の新しい経済学は新古典派と称される)、以後、人間の意思決定が明示的に経済学の2に含められるようになる。

財の消費によって、個人は効用(utility: さしあたり、満足度を示すものと思っただければよい)を得る。ここで、財の消費をほんの少しだけ「追加的に」増やしてみると、効用も少しだけ増えるだろう。この微小の増加分を限界効用(marginal utility)という。過去は振り返らず、現在を基準とした変化に注目するのである。

Xさんが一杯五〇〇円のグラスワインを飲むかどうか考えているとしよう。一杯目がXさんにとって八〇〇円分の限界効用をもたらすとすると、代金を払っても差し引き三〇〇円分の利益が残るから、Xさんは一杯目を飲むだろう。では二杯目はどうするか。通常、同じ財を消費すると飽きてくるため、二杯目の限界効用は一杯目の限界効用よりも小さくなる。けれども、二杯目がたとえば六〇〇円分の限界効用をもたらすなら、二杯目も飲むはずである。逆に、二杯目の限界効用が四〇〇円しかなければ二杯目は飲まない。限界効用が価格を上回る限り、Xさんはワインを飲み続け、下回れば飲むのをやめる。こうして導き出される消費量は、Xさんの得る利益の累計を最大にする消費量と一致する。次の電柱まで目指すマランランナーと同様、この意思決定における考慮要素は後ろ(過去)にはなく前(将来)にしかない。

最適な意思決定を行うためには、総量や平均値ではなく、「追加される微小量」に着目し、その際に生ずる追加的な便益(限界便益)と追加的な費用(限界費用)とが等しくなる点を探せばよい。このような追加の微小量をもたらす効果は、限界効果(marginal effect)と言いつぶされることがある。限界効果とは、つまるところ微分である。微分法が関数の変化をつかむための優れた手段であるのと同じく、限界効果の分析は人々の意思決定や行動の変化をつかむための優れた手段である。法の効果に関しても、微小量に着眼することで、限界効果を考えることができる。と言うより、コストパフォーマンスのよい法政策を案出したいのであれば、限界効果による評価を踏まえておくのが望ましい。一見もつとらしく思える直観的な政策論も、限界効果の点から見直してみると適切とは言えなくなる場合がある。

たとえば、他者に害を及ぼす行為(物を盗む、騒音を出す、迷惑な場所に駐車する、など)を抑止したいと政策担当者が考えているとしよう。こうしたときによく提案されるのは、有害な行為を実行した個人に対してサンクコストを科すという策である。十分に大きなサンクコストによって脅しをかければ、人々はそのような行為の実行を思いとどまるかもしれない。注意を要するのはここから先である。まず、ある行為に関する意思決定は「実行する・実行しない」の二者択一とは限らず、程度や態様を選べるのがむしろ普通である。何をどれだけ盗むか。どれくらい大きな騒音を出すか。あるいは、何分くらい駐車するか。単一に見える行為であっても、仔細にみれば数多くの意思決定から成り立っていることがわかる。もし完璧な抑止が不可能だとすれば、有害性がより大きい行為を抑止すべきことになる。

そうだとすると、サンクコストは、行為の有害性が大きくなるほど厳しくなるように設定されなければならない。なぜなら、仮にサンクコストの大きさが有害性に関係なく一定になっているとすれば、より有害でない行為を選択するインセンティブが失われてしまうからである。サンクコストに限界効果を發揮させるためには、3な設定が必要なのである。したがって、「刑罰は罪過に相応したものであれ(Culpae poena par sit)」という法原則は、衡平の観点からだけでなく、限界効果の観点からも正当化されうる。

この議論からは、「それ以上考えられないほどの不利益を刑罰として設定すると、抑止がなされない可能性が出てくる」というコロラリーが導かれる。最大限に重い刑罰の典型例は死刑であるが、死刑をもって処罰される行為をすでに実行した人にとつては、4。諺にあるように、「毒を食らわば皿まで(As well be hanged for a sheep as a lamb: どうせ絞首刑にされるのなら、子羊を盗むよりは親羊を盗め)」なのである。もちろん、限界効果の話が死刑制度をめぐる論争に決着をつけてくれるわけではないけれども、問題点の摘示という点で意義はある。

(注1) サンクコスト＝制裁。
(注2) インセンティブ＝行動を促す要因となる動機や刺激。
(注3) 衡平＝つり合いが取れた状態。
(注4) コロラリー＝論理的に自然に導かれるような帰結や結果。
※問題作成の都合により、一部省略した箇所がある。



問1 傍線部(イ)「美德」・(イ)「脳裡をよぎり」は、本文中ではどのような意味か。最も適当なものを、下の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **21**・**22**。

(イ) 美德

- 21
- ① 言い訳となる大義名分。
 - ② やむを得ない判断。
 - ③ 道徳的に崇高な精神。
 - ④ ほめるべき立派な行為。

(イ) 脳裡をよぎり

- 22
- ① 思考を混乱させて。
 - ② 先行きを心配させて。
 - ③ 頭の中に思い浮かんで。
 - ④ 視界に入ってきて。

問2 傍線部A「越川橋梁」に関する筆者の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **23**。

- ① この橋梁を利用するためには線路の建設も必要であり、そのことが損失の拡大に拍車をかけることになったことは、サンクコスト効果の好例といえる。
- ② この鉄道橋を完成させるために払った犠牲の大きさとらわれることなく、鉄道橋の利用を諦めた経営判断について、肯定的にとらえられる。
- ③ 建設にかけた莫大な犠牲から、当時の社会における鉄道産業の存在感をうかがわせる事例にもなっており、戦時中の遺構としての価値を高めている。
- ④ 人命までも犠牲にして建設されたが、列車が通る橋としての役割を果たすことはなかったため、意思決定の失敗の事例としてとらえられる。

問3 空欄 **1** に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **24**。

- ① 相対性
- ② 合理性
- ③ 一貫性
- ④ 可塑性

問4 傍線部B「有力な代替案」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **25**。

- ① 財に内在する客観的な価値を測るために、効用という架空の共通の尺度に直して比較するという案。
- ② 財の効用を増やすために過去に投下された労働量の合計から財の価値を測るという案。
- ③ 財の生産のために投下された労力を現在の市場で再び入手するためにかかる費用で測るという案。
- ④ 現在を基準として財の消費によってどの程度の効用を得られるかで財の価値を測るという案。

問5 空欄 **2** に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **26**。

- ① 専売特許
- ② 置き場所
- ③ 守備範囲
- ④ 裁量範囲

問6 傍線部C「最適な意思決定」に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **27**。

- ① 財をできるだけ効率的に消費するために、その財の限界便益の増加分が限界費用の増加分を上回る場合に追加的な消費を行うという意思決定。
- ② 財をできるだけ効率的に消費するために、その財の限界便益と限界費用との差が小さいときには追加的な消費を行わないという意思決定。
- ③ 財から得られる便益の累計を最大化するために、その財の限界便益と限界費用とが一致する点を考慮して行う意思決定。
- ④ 財から得られる便益の累計を最大化するために、その財の限界費用の変動にあわせて財の消費量を増減させていくという意思決定。

問7 傍線部D「注意を要する」とあるが、どのような「注意」をすべきだと筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **28**。

- ① 有害な行為をした個人にサンクションを科すとき、十分に大きなサンクションを設定しないと、有害な行為を抑止するという目的を達することができないことに注意すべきだと考えている。
- ② 個人の有害な行為にサンクションを科すために行為の有害性の大きさを測らうとすると、サンクションを有害な行為の程度や態様に応じて細かく設定しないと、正確に測れないことに注意すべきだと考えている。
- ③ サンクションを科して個人の有害な行為を抑止しようとするとき、行為の有害性の大きさを厳正に調べてサンクションを設定しないと、個人の意思決定の自由が損なわれてしまうことに注意すべきだと考えている。
- ④ 有害な行為を抑止するために個人へのサンクションを利用するとき、行為の有害性の大きさに応じたサンクションを設定しないと、有害な行為を抑止する効果が失われることに注意すべきだと考えている。

問8 空欄 **3** に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **29**。

- ① 段階的
- ② 一義的
- ③ 限定的
- ④ 網羅的

問9 空欄 4 に入れるべき言葉として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

30。

- ① そこから先の追加的な刑罰はゼロになってしまふ
- ② それより前の刑罰の基準は未知数になってしまふ
- ③ それより前の刑罰の基準はゼロになってしまふ
- ④ そこから先の追加的な刑罰は未知数になってしまふ

問10 筆者の主張として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 31。

- ① サンクコストにとらわれず合理的な判断をするために限界効用の変化に着目した考え方は有効であり、総量や平均値を考慮して経済的な意思決定を行ったり、法制度を巡る議論を行ったりする際の助けになる。
- ② サンクコスト効果の視点を取り入れることで、労働価値説を批判的に検討することが可能になった結果、限界効用の変化に着目した考え方が導き出され、経済学や法制度の分野に大きな影響を与えた。
- ③ 限界効用の変化に着目した考え方を導入することで、過去の歴史にあったような不合理な意思決定による人命喪失などの悲劇を回避することができ、死刑制度などの法制度を検討する助けにもなる。
- ④ 限界効用の変化に着目した考え方は、経済的な意思決定だけでなく法の効果についても応用することができ、合理的な意思決定を行ったり、効果的な法制度を設計したりする助けになる。